

東亜同文書院生の植民地観と台湾

——『大旅行誌』における植民地主義言説に関する試論——

Taiwan and the Colonial Image by Toa Dobun Shoin Students:
Preliminary Analysis of Colonial Discourse in the Great Journey Journals

岩 田 晋 典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskito@gmail.com

Abstract

Although Toa Dobun Shoin college was deeply influenced by Japanese imperialist expansion, its relations to imperialism and colonialism has not been investigated sufficiently. This paper focuses on the Great Journey Journals series, a compilation of travel diaries written by the college students who conducted month long field research tours throughout East Asia, and investigates how they described colonialism by analyzing the usage of colonial vocabulary, such as “colony (植民地/殖民地)”, “colonial” and “colonialism”. The discourse analysis reveals that the students held a dichotomy of two types of colonialism between “West” and “Japan”. From the viewpoint, the rule of “West” was a bad/old/unfair colonialism with discrimination and had to be replaced by Japanese, who would be able to finish the colonialism and to establish a new/good/fair reign, where the assimilation of Asians to Japanese would be a logical consequence and decolonization without cultural divide would come true under Japanese domination.

I. 序論

東亜同文書院には“スパイ学校”と見なす否定的なイメージが根強くあるが、それを中立化し、客観的に研究対象と位置づけていく営みは着実に集積しつつある。たとえば大旅

行調査研究のパイオニアである藤田佳久は折に触れて東亜同文書院のビジネススクールとしての側面を強調してきた¹⁾。

その一方で、東亜同文書院の書院生たち自身が帝国日本のアジア進出や植民地化、侵略戦争をどのように捉えていたのかという問題については、研究の蓄積が十分にあるとは言いがたい。本論の分析対象となる『大旅行誌』シリーズの前文で愛知大学学長（当時）がわざわざ「当時の風潮を反映して、中国や中国民衆に対する差別的な表現が散見される」（東亜同文書院、2006）と断っていることが示すように、大旅行調査の記録日誌『大旅行誌』には中国をはじめとする旅行訪問地での出会いが、好悪の双方を含めて、赤裸々に記されている。

そこで本論では、『大旅行誌』に書院生が記した記述における植民地主義言説について論じたいと思う。『大旅行誌』では香港に対して「植民地」という表現が枕詞のように用いられる。それと対照的に台湾が「植民地」と呼ばれることは少ない。以下での考察により、その論理的背景も明らかになるであろう。

分析の方法としては、「植民」（「殖民」も含む）という語彙に注目して、「植民地」、「植民政策」、「植民都市」など「植民」が含まれる箇所を抽出し、その意味内容の把握を試みる。以下本論では、こうした「植民」を用いた諸々の表現を植民地的語彙と呼ぶこととする。

『大旅行誌』の中には、集合的な人の移動といった簡潔な意味で植民地的語彙が用いられるケースも存在する。たとえば、満州地方のある都市が漢民族の「植民」によって形成されて今日まで至っているというように、その地の歴史的な云われを説明する際に用いられる場合などがそれだ。

だが、それをのぞけば、『大旅行誌』で植民地的語彙が使われるケースは、第一に欧米や日本の列強諸国が他国を統治する技術、第二にその結果生じる文化的混交、第三に欧米による不当な支配（への批判）、という三つの意味合いに大別できる。以下では順に取り上げていきたい。

II. 近代的統治技術として植民地政策

1) 西洋の統治に対する評価

言うまでもなく、書院生がアジア各地で大旅行調査を行ったころには、すでに西洋諸国が中国大陸とその周辺地に進出してから久しい年月が経過していた。そのため、『大旅行

1) たとえば、東亜同文書院を概説したブックレットの（藤田、2007）や、香港のテレビ局が荒尾精をスパイとして描いたことを批判的に紹介した（藤田、2012）など。

誌』の中で植民地的語彙は、特定の地域の固有名詞あるいはそれに準ずるもののように用いられたり、その土地のアイデンティティを簡潔に表現するために使われることもあった。たとえば「海峡植民地」や「英国植民地香港」、「ポルトガルの植民地マカオ」、さらに日本領有前の青島を「独植民地」と言及するなどの例がある。

書院生は、さまざまな植民地を訪問し、行く先々で植民地統治という近代的な技術についての見聞を広めている。肯定的な評価が頻繁に与えられたのが、帝国日本が国造りにおいてモデルとした英国の植民地統治である。第10期生（1912）は、香港を訪問し、ビクトリア・ピークから港湾を一望した後で次のように述べている²⁾。

此壮大なる貿易港を自由港とせし英人の雄大なる気象と、墓標と鍋釜とのみを携えて至る所植民地に成功せし英国人の精神を思えば共に敬慕に堪えざるなり。（大旅行誌 6: 260）³⁾

同じように、第14期生（1916）は香港の大きな道路、テニスコートをそなえた邸宅、ピークから見た港湾を賞賛して、「英人の気宇の大なるに賛美の言を発しないで居られようか」（大旅行誌 10: 314）と感嘆している。第28期生（1931）も伝染病の島にすぎなかった香港が英国の統治によって繁栄を極めたことを、「天使と雖も満足をあたへる事が出来なかった香港は英国の王冠中最も燦ける宝玉となった」（大旅行誌 23: 74）と讃えている。

書院生にとって、舗装道路というインフラはその土地の発展度合いを測る指標であったようだ。英領のマレー半島を訪問した第36期生（1939）は次のような賞賛を残している。

道路のある所、必ず住民蟻集し、経済が営れるは原則である。前人未踏のジャングルを切り開いて建設せられた苦心たるや想像に余りがある。が是あってこそマレーの開発が長足の進展を遂げ、植民政策の能率を高めて、彼等英人の搾取的本能をして将来に満足を与えるべき礎となったのである。百年の計を樹つるに、唯目前の利益にのみ固執して、将来への進歩速度を考慮に入れぬとは、逕庭あるというもの、真に彼英国者流の政策の打算的なると同時に、学ぶべき諸黙あるを歎ずる。（大旅行誌 31: 422）

英領以外では、オランダの植民地統治もしばしば評価されており、そこで彼らが注目するのも道路である。第30期生（1933）は訪問先のジャワ島でオランダと英国の統治を次のように併置している。

2) 丸カッコ内の西暦は当該書院生の調査旅行年を指す。以下同じ。

3) 『大旅行誌』シリーズにかぎり、出典は（大旅行誌 巻番号：ページ数）というように記している。

爪哇の道路は世界でも有名で爪哇島中に二万里も有り数千尺の山頂まで全部アスファルト敷きの八間道路である。是は和蘭殖民政策の特色で英国の銀行政策と並び称せられて居るものだ。(大旅行誌 25: 477)

こうした高評価とは対照的に、フランスの植民地統治はもっぱら批判の対象となっている。上海から香港そしてハノイまでの沿岸部を往復した第18期生(1920)の記述には、英国とフランス二つの統治についての興味深い比較がある。

まず英国は、「東洋では尤も非衛生的であり且つ不健康地と見做され、ペスト、コレラの為に人命の奪われる者が夥しかった」香港を「アングロサクソンの不屈不撓絶大なる努力奪闘と、其の後に擁する豊富なる財力」でもって「今や世界に比類なき美景の島」に変えたのであるが(大旅行誌 13: 452)、フランス人は「何処までも享樂の民」(ibid. 458)であり、その「国民性」は「英国の如き堅実な努力がない」(ibid.)。さらに英国については、

私は英国のこの香港経営を為すに当りて大なる努力と、財力とを、惜まざりし彼の殖民政策実現に対して、あく迄斃れて後止むの後精神大気概のあるのは、流石大国民たる英国なるかなと大なる敬意と深き尊敬とを払うに吝かならざる者である。(ibid. 452-453)

と褒めちぎるのに対して、フランスについては、

仏の殖民政策は余りに吸利主義である。彼等は植民地を撫育することを知らぬ。資本家は巴里のオペラの中で青い酒に酔いながら、植民地の利益を捲きあげて了う。従ってその植民地経営に於ても英米のその如き発達を見ない。この河内もやはりその例に洩れない。(ibid. 459)

と酷評している。こうした否定的な評価の背後には帝国日本に対するフランスの敵対的な政策もあったようだ。以下は第33期生(1936)の弁である。

外国資本の投資を極端に防止する仏の保守的殖民政策により、肥沃広大なる東京の大原野は、今日尚未智な安南土人の手により耕作されてるに過ぎず、其の他幾多の豊富な天然資源を有しながら、未だ何等の開発も見していない。我が国の対安南貿易は、仏の禁止的高関税により、我が商品の輸入は殆んど不可能で、貧困の土人達は、数千哩の彼方ヨーロッパより運ばれる高価な商品の購買を余儀なくせしめられている。(大旅行誌 28: 492)

2) 欧米を参照点として

後発の帝国であった日本にとって、こうした近代的統治技術、あるいはそれを使用する場としての植民地が、欧米と技術力を競うものという様相を呈してくるのは言うまでもない。

書院生が「欧米に対して日本はリードしている、優れている」と捉えれば、日本の統治は肯定的に描かれるし、逆に「遅れている、劣っている」という認識になれば、否定的な語りになる。そして全体として見ると、後者のほうが断然多い。言い換えれば、日本の領土や勢力範囲内について植民地的語彙が用いられるとき、大抵の場合ネガティブな記述となっている。この傾向は、『大旅行誌』全体において多かれ少なかれ確認できる。

まず肯定的な記述についてであるが、否定的なものより少ないとしても、台湾や大連に関する部分で目にすることができる。とくに台湾について顕著だ。第16期生（1918）の両広湖南班は「憧れの地台湾」を訪問し、次のように帝国日本の植民地経営を自画自賛している。

今日植民地の経営の古参者たる英仏が吾が台湾経営を始めたのを怪しんだのが変じて賞賛に化したのは吾人の誇りとするに足る、従来西洋人は吾東洋人に植民地経営の能力無きものとして早合点をしてをる矢先、日本が東亜の代表として見事に台湾経営の歩を進め亜細亜人のために気を吐いてこの断定を裏書きしたのは痛快事である。（大旅行誌 12: 298-299）

台北の町に就いて述べれば、全々新設市街にして、邦人の都市経営としては完全に近い、市区は整然として、アスファルトの大道が四通八達し其両側には規則正しい同型のルネッサン式の建物がズラリと並列しておる所などは、上海香港でも見られない（ibid. 299）

次に、否定的な記述は、大きく三つのテーマに整理できる。娘子軍、植民地者の投機的場当たりの行動様式、植民地における文化の不在である。

娘子軍についての記述は頻繁に見られ、枚挙に暇がないくらいだ。1908年に華南を旅行した第6期生は、「天草島原の娘子軍が香港の灣仔を参謀本部とし南清より南洋へかけての活動」に従事しており、「外国の殖民は宣教師により其の緒を出し我国の移民は淫売婦諸姉によりて導かる」と嘆き混じりに記している（大旅行誌 2: 32）。第12期生（1915）の報告によれば、ベトナム・ハノイの総人口15万のうち「邦人一百余と称するも正業に在るは其の一部他は我国特殊植民政政策の先鋒娘子軍」である（大旅行誌 8: 274）。

第14期生（1917）は山東省博山を訪問した際、同地に娘子軍が入っていないことを評価しつつ、「常に娘子の禪を押し立てて進む日本人式殖民」（大旅行誌 10: 374）と帝国日

本の海外進出を揶揄している。第28期生（1931）は、こうした皮肉とは別に、娘子軍の存在を「海外発展」の失敗要因の一つに挙げている。

今迄の日本の植民政策が、労力ばかりを海外に出して資本の背景を持たせてやらず、而も無智な労働者や娘子軍の渡航が多かったので、折角の海外発展も予期の成功を収め得なかった。（大旅行誌 23: 619）

第二のテーマが日本人植民者の投機的場当たりの行動様式については、第14期生（1916）が「情けない殖民地気質」と題して残している一節を紹介しよう。

青島は陥落した植民地へ行けば金儲けの蔓が転がって居る様に考えた内地の人や、台湾や朝鮮満州あたりで失敗した徒手空拳党が火事場泥棒の様に秩序の紊乱に乗じて何か一仕事せんと目論で皆青島へ山東へと流れ込んだ。（中略）「英国の殖民地には算盤の後に国旗が従い、日本の殖民地には国旗の後に算盤が随う」と某経済学者は説破したが残念ながら我が殖民地では常にこの情勢にある、然もその算盤たるや甚だ不完全な算盤であるのだ。（大旅行誌 10: 508-509）

ここでは、無計画性は日本人植民者大衆とともに帝国日本にも向けられている。後続する箇所でも日本人植民者が「一時的金儲の手段として殖民地に来て働くに過ぎぬ」と形容されている（ibid. 509）。

目先のことしか考えない日本人植民者が多すぎるという現状認識を前に、単に嘆いたり批判したりするのではなく、建設的な提言じみた語りが表れることもある。書院生自身ではなく、旅行先で出会った人物の言葉であるが、以下紹介しよう。第40期生（1942）の一人は広東で領事や先輩と面会し、植民地統治政策について考えを聞く。そのうちの一人は、英の植民地政策は古く、それに代わる新しいもの（その行き着くところが「大東亜新秩序」）が必要なのであるが、「現実の問題として、英国が過去百年に亘って取って来た政策以上に出る事が出来るであろうか」と問題提起する。同人物によれば、そのためには、支那人には上位の尊敬される立場から接する（「上のベース」に立つ）べきである。「上のベースに立つ事は、勿論支那人を圧迫する事でもなければ、大東亜新秩序建設という聖なる理想に抵触するものでもないと思う。」（大旅行誌 33: 349）

けれども、問題は日本人側にある。「眼前の小利獲得にキウキウたる我利我利亡者共の何と多き事よ」という状態であり（ibid.）、「同じレベルに於いて支那人と接触又は競争せんとして敗れた人達」ばかりなのである（ibid. 350）。この状況の改善策として彼は、「結局は植民地の生活をカムフラブルにする事が植民政策の根本原理だと思いますね」

(ibid.) とまとめている。それに対する筆者たる書院生の答えは「何時もの事乍ら学生気分抜け切らない先輩の侃々諤々の理論を嬉しく聞き、たそがれ迫る頃宿舎に帰る」というものであった (ibid.)。

第三が、植民地における文化の不在である。不在に対する嘆きは、上記二つのトピックと一緒に言説化することも珍しくない。たとえば、第18期生 (1920) は沙市滞在中に次のように、“日本人の娘子軍、料理屋”と“西洋人の公園、乗馬”を対比しながら、帝国日本の植民政策を批判している。

我国の移民が至る所で排斥せらるるは、政治上経済上の種々の原因もあるうが又一半は島原天草の娘子軍を先頭に内地にて生活に窮したる劣敗者が移民するに依り至る所にて風紀を紊し警察の厄介になる者多くなり、漸々と外人より排斥せらるるに至るのである。故に今後はどうしても選鍊された学問のある多くの人を送り、着実なる風紀と善良なる習慣を形成し以て日本人の真価を公告せねばなるまい。(大旅行誌 13: 157)

一体日本人は植民地に於ては娯楽の設備少く高尚なる趣味の涵養に重きを置かぬ。従て茶屋料理屋に発展する。邦人の少し居れば必ず料理屋はある。日本の植民地開拓の先駆者は実に娘子軍である。身体は害するし性質は粗暴になる。率いては日本人の排斥の声も起る。此の点に於ては西洋人は余程注意しておる様に見える。公園を作る、コートを作る楽器を設備する殊に日曜等には乗馬をやる。如此くして彼等は元気に愉快に植民地生活を送るのである。(ibid. 158-159)

また、済南を訪れた第13期生 (1915) は、イギリス人が設立した博物館やドイツ人が運営する病院を目にして、次のように嘆いている。

濡手に粟的の日本人とは雲泥の差がある。種を播かねば実は得られないと云う事を知らない日本人に何ぞ植民地の経営が出来よう。(ibid. 490)

III. 文化の混在・混交

『大旅行誌』で植民地的語彙が用いられる際、それが西洋や日本の文化が混在あるいは混交している状態、あるいは混交が生じている場所という意味になっていることも珍しくない。

植民地における複数の文化の混在、多民族の共生を記した例として、大連の街の様子についての第25期生 (1928) の描写を紹介しよう。

大連は植地的な感じを如実に与える町であると思う。奉天長春も幾分そうだが大連ほどには感じない。和服と洋服と支那服とが等分に町を通る。夜店で雑貨や古本やステッキ等を日本商人が売っているかと思えば、一步裏通りへ出ると支那人の麵屋があり煙草の露店商人がいる。老いぼれたロシア乞食が手を差し出ししながら執拗く五六間も追いて来る。(大旅行誌 20: 225)

次の第29期生(1932)による記述にも「大連」が表れる。

私達一人は汗と埃が化合した妙な臭気のするクチャクチャの便服——背中には真白な塩さえ生産されて居ました——をぴったりと身に着け、頭には黒くて赤い——勿論買った時は白かった——草帽を手で押さえ乍ら(風を恐れたのです)或時は大連奉天長春と植民地風にモダンな都大路を闊歩して、明朗でお転婆で現代的でヤンキー的なミス満州の同情——少くも僕等はそう決めて居る——を惹きました。又或る時は洮南海龍等馬賊横行する田舎の支那宿で——迎賓旅社と名は立派ですが日本の木賃ホテルです——小癩な南京虫と深夜に角逐して早朝の汽車に乗遅れ等し乍ら、旅行の前半を終えました。(大旅行誌 24: 101)

第25期生のものほど多文化性に言及しているわけではないが、「植民地」「モダン」「都大路」「ヤンキー」「満州」という言葉が用いられ、日本・西洋・満州という三者が一つの文章の中に統合されている。またそういった「植民地」の対句のように、「田舎」「支那」「南京虫」といった言葉で文章が構成されている点も興味深い。

第29期生には、大連での滞在を記した別の班もいて、次のように「異国情緒」という言葉を用いて大連の街を讃えている。

初夏の光眩しい六月二十五日の昼下り、僕等は埠頭事務所のルーフに立った。国際的都市美を誇る高壮な煉瓦造りの建築に、異国情緒豊かな大連市街は、此処から一望の中なのだ。我々は大連に満洲色を求むるのは寧ろ困難である。それ程大連は、植民地都市としての澆刺とした進取的清新さと、近代的文化都市としての匂いを多分に有っている。(ibid. 323)

こうした文化の混交が批判的に扱われる場合もある。第13期生(1916)は奉天に滞在了際の記述で、「日本語と支那語」の混交について言及している。すなわち、「チャンコロ」の瓜売りが「日本語と支那語のチャンポンで怒鳴る」ことに辟易し、自嘲っぽさを漂わせつつ「チャンポン」的言葉遣いを「矢張り吾が殖民地だけありだ」と評している(大

旅行誌 9: 86)。

第29期生(先の者とは別)は、植民地的語彙を用いて朝鮮・京城の街の不健全な雰囲気批判している。日が暮れると京城には「植民地的な歓楽が躍り出す」(大旅行誌 24: 390)。そこでは「カフェー」は「ジャズとアルコールの渦巻く恋の競売場」である。京城・本町を次のように述べている。

近代文明の生んだインテリともろもろのプチブル達の遊宴地だ。誠に不生産的な、非衛生的な遊宴地ではあるが。(ibid. 391)

IV. “欧米による不当な支配” への批判

植民地の意味合いに、国家間の支配従属関係が加わることも多々ある。欧米による不当な支配ならびにその場所に対して植民地的語彙が用いられるケースである。香港やマレー半島の英領、インドシナの仏領などが良い例なのであるが、さらに、帝国日本を取り巻く国際環境が悪化する1930年代以降は、“不当な支配”の対象にしばしば「中国」という一国家が位置づけられるようになる。すなわち、“中国という国家が半植民地化されており、中国を含めた大東亜を帝国日本は解放しなければならない”という言説である。

1) 欧米統治の不当性

前述のように、学校や病院などの文化的事業はかつては欧米による統治において日本が見習うべきものと見做されていた。1930年代に入ると、それさえも批判の対象になっていく。海南島を訪れた第33期生(1936)にとって、教会、病院、養育院などはもはや植民地化の道具でしかない。

米国教会及び病院その官舎。仏国教会及び養育院外人海関吏の広大な建物。此処にも文化施設に名を仮る支那植民地化の手が伸ばされている。(大旅行誌 28: 441)

同じ批判は、「大体支那にては、外国系教会学校が隠然たる勢力を有して、外国權益の進出を有利に導き、恰も植民地獲得の先陣を為しつつあるかの観がある」(大旅行誌 31: 76)という第36期生(1939)の記述にも見られる。

同じような欧米の植民地統治批判は中国以外の土地についても述べられている。第II章で紹介した第36期生の英領マレーにおける道路の賞賛も、やはり支配があってこそなのだ。

全ての植民地がそうであるように、マレーの歴史も、植民者と被植民者の深刻な力の争闘で飾られている。そしてマレー土人は既に骨肉迄搾取されて、完全に無気力さを、天日に暴露し、再び起つ能わず、香り高き文化の享樂は「もてる者」のみの所有するところである。(大旅行誌 31: 423)

2) 中国における国家単位での植民地化

満州事変が勃発した年に調査を行った第28期生(1931)は、満州北部におけるソ連の経済政策について論じた論稿の中で「世界の植民地である中国」という表現を用いている(大旅行誌 23: 652)。翌年満州国が建国された1932年に調査をした第29期生は、「商品輸出、資本輸出のための競争、勢力範囲の確保の為めの競争を尖锐化せしめる中国こそは世界中で一番後まで取残された、最も実り多き半植民地である」(大旅行誌 24: 10)、あるいは「半植民地中国の体内に生長して来た資本主義はその政治的表現たる中国の国家的統一を必要とした」(ibid. 15)と述べている。

また、第34期生(1937)の記述からは「半植民地・半封建的」という表現も見え始める。以下は、山東省農村についての調査を行った際の記述である。

私が鄒平県を尋ねたのは山東郷村建設研究院の現在支那農村に対する梁院長の意見を聞くのも一つであったが、当院の機関雑誌等に於て多く論ぜられた支那農村建設運動がどれ程まで実地に成果を挙げているかが見なかった為であった。ゲマインシャフト的な郷村団体によって、半封建的乃至は半植民地的であると言われる支那農村を大家族的結合で解決救済出来得るものであるかが知りたかった。そして梁院長の説く倫理本位的社会従って家団が即ち天然の基本関係なる基礎理論の実施に於ても農村それ自体の改良が第一に採らるべき現実の政策であるべきことも承知もしていた。(大旅行誌 29: 159)

1930年代以降になってから、「半植民地」や後述の「半封建的」あるいは「半資本主義的」などの表現が用いられるようになることも興味深い。中国が各国と不平等条約を結んでからかなりの年月が経過しており、書院生も上海はもちろん旅行の先々で不平等条約の象徴たる租界を訪問していたにもかかわらず、この時期になってこうした用語が多用されるようになってきている。また、租界についての記述で植民地的語彙が使われるケースを見つけるのは容易ではない。数少ない例として、第13期生(1916)は天津の租界に言及した際に「植民地は其の本国の政治風俗社会算を表す唯一の鏡なり」と述べている部分がある(大旅行誌 9: 260)。もうひとつの例が、上海について述べた第35期生(1938)のものである。

徐家雁のメイン・ストリートを中央として東側の街並がコンクリート造りに支那風に装をこらした仏租界側の一筋、それに対し支那側の西側は従前よりは十分良くなったが、なんてみすばらしい煤けた低い軒並の連りだろう。この街を歩くと、外から強いられる半植民地的性格、内から抜けきらぬ半封建的性格の余りにもはっきりしたみせつけに合うと誰かが云ったっけ。(大旅行誌 30: 472)

ここでは、「半植民地的」と「半封建的」という対句を用いて、欧米的空間と中国的空間の違いを説明している。次の第33期生(1936)による記述は、自動車という当時の先端技術をたとえに、中国という一つの国家が植民地化の対象になっているとした内容であり、また資本主義という言葉も用いられている。

彼等の孜々たる労働の前を文明の威風を払って走り去る自動車、それこそ資本主義が中国内に力強く喰い込ませた鉄の爪で、これにより中国の農業生産や工業生産は日に日に植民地化されて行きつつあるのだ。(大旅行誌 28: 83)

3) 帝国日本の責務：解放

中国が「半植民地的・半封建的」と形容されていくのと歩調を合わせる形で、「植民地」の解放や救済が帝国日本の役目だという記述も見られるようになっていく。

ある第33期生(1936)は「打倒日本帝国主義」のスローガンが「燎原の火の如く」広まっていた広東・広西地方を通過した後に香港を訪問する。香港は、「英国植民政政策百年の計成ってサスガに重厚な感じのする港」なのであるが、大衆が「毛唐の走狗」に成り下がっていると悲嘆している(大旅行誌 28: 468)。

「汝等何故目を覚まさぬ！」と奴鳴って見ても、馬耳東風。而も大部分の中国人が斯くの如きならば、生さしい日支親善の口号など称えていても屁にもならぬと痛感す。日本は躍進しなければならぬ。最後の目標さえ誤らず、正しいものなれば、「帝国主義」と云われても「侵略主義」と云われても、又誇大妄想的な一部の中国人の「抗日救国」などに幻惑されることなく、只管目標に向かって力強く進まなければならぬと、フト気が付くともうO・S・Kの棧橋を通り越して居た。(ibid. 468-469)

欧米との競争への意気込みを熱く記す彼にとって、自らが属する帝国日本の「躍進」は正当なのであり、実現しなければならぬ目標なのである。

彼の考えは、『大旅行誌』全体を貫くパターンの則ったものである。すなわち「帝国主義」という言葉が欧米主体として用いられ、日本が関係する場合はあくまでも「打倒日本

帝国主義」などの支那人ら他者の言葉の引用となるパターンだ。つまり、書院生が「帝国主義」という言葉を用いて帝国日本の大陸進出・侵略を自己批判的に記述している箇所はほとんど見当たらない。第29期生（1932）の一人がその年の『大旅行誌』の特集「満洲国印象記」の中で、帝国日本とソビエト連邦とを対照させる形で「日本帝国主義」という言葉を用いているくらいである。「帝国主義」の言葉は、早い時期では第9期生（1911）が支那人の言葉を引用した箇所にみつけることができるが、頻出するようになるのは、1930年代以降になる。

帝国日本の「躍進」がアジアを導くと述べる箇所には、次のものがある。ある第40期生（1942）は、日本軍が攻略した広東を訪れている。当地の状況は、「事変前、共産主義の根元地、抗日資金の流入門戸、排日の根拠地も皇軍一度進むや根底から覆されて、今見るような平和境楽土の現出をなした」（大旅行誌 33: 324）といったものである。彼は広州の租界・沙面を訪れ、「東洋人蔑視の民族的偏見」に対する憤りを吐露している。この「東洋人」は、日本人や中国人を含む範疇である。

吾々同胞は自身のコンフオータブルな生活、物質的な安楽を犠牲にして、精神の金字塔を真先に築いて行った。畳二三枚と浴衣さえあれば、満足して高い忠雍塔を仰いで心の底からの喜にうたれる。この喜は民族の中の個として真に具体的な吾々の生き方を把んでいるもののみ知る喜であろう。沙面を築いた英人に、他の必要も無論あったに相違ないが、支那人とは一緒に住まぬぞよ、俺とお前とは身分が違う、こんな気持が無かったとは誰も保証が出来ない。歴然と東洋人蔑視の民族的偏見が看取されるのである。このことは香港に於ても、見られる。如何に皇領植民地とは言え、島のある地点から上は中国人の居住を許さぬという事実、こうした事実に出会う度、私は深い憤りの念が湧くのであった。(ibid. 326)

さらに、これとは別の第40期生による植民地的語彙を用いた記述には、かれらの旅行年の4年前に第一次近衛内閣が発表していた「東亜新秩序」という言葉も含まれている⁴⁾。

我々が東亜新秩序建設のため邁進しているのは明らかだ。併しこの東亜新秩序建設の具体的内容は如何にあるべきであろうか。従来の英米の植民政策の失敗に鑑み、新秩序の構想は更に高次の立場よりなされねばならぬ。即ち将来建設さるべき東亜新秩序なるも

4) 本稿では「植民／地」という言葉を用いた箇所に注目して議論を展開しているのであり、「東亜新秩序」という用語を用いた記述は他にも多数存在する。

のは、日本民族が指導的地位に立ち、他の民族をして、その所を得せしめねばならぬ。そしてこの新秩序の盟主たるべき日本民族は他の民族を指導するに従来の植民政策以上の政策をもってし、且常に優秀なる民族であらねばならぬ。もしこの盟主日本が或いは従来の英米のとれる植民政策の域を脱し得ず、或いは新秩序完成の幻夢にみだりに酔うのみならば新秩序は再び破綻を来し、灰燼に帰すは過去の歴史に照して明らかである。(ibid. 80)

従来の英米の植民政策は「失敗」なのであり、帝国日本が「常に優秀な民族」であるよう努力しながら「指導的地位」に立ち、「従来の植民政策以上の政策」を作り出さなければならぬ、という。書院生自身による東亜協同体論と言えよう。

V. 台湾に焦点を当てた考察

1) 植民地統治の“成功例”

以上の分析をさらに台湾に当てはめて考察してみよう。まず第一に指摘したいのは、台湾が“成功例”と位置づけられるという点である。『大旅行誌』全体からすれば舶来の技術である植民地統治を日本はうまく扱い得ていないとする記述が大勢を占めているが、それとは逆に、台湾については帝国日本が技術力を示したと位置づける傾向にある。1911年に訪れた第9期生・汕頭広州湾班は近代的な台北の街並みに感心し、次のように述べている。

これが数年前迄汚穢なる支那街と藪沢の地だったとは想像することが出来ぬ児玉後藤二氏が此地を理想的大都市とせんとし先ず四圍城壁を毀ちて市区大改正を断行したによるのでかゝる大々的市街建設は総督府の威力にして初めてなし得る快挙である吾等はこの光景を見て台北はひとり台北の首府たるのみならず他年太平洋の我利権拡張の中心地ならんと想像して無限の快感禁ず可らざるものがあつた。(大旅行誌 5: 374-375)

もちろん植民地台湾を否定的に描くケースもあるが、それは官僚主義や近代性の違和感に関するものであり、植民地統治自体を否定するものではない。たとえば、1914年に華南沿岸部を回り香港からの帰路台湾に立ち寄った第12期生・廣東班の記述である。

台北は帽子の都剣の都、猫も杓子も役人様だよと、金筋入の帽子に短剣姿、往来狭しと肩で風切る有様は、我国官僚政治の縮図とも見るべく候。

建物は俗悪なる洋館多く、田舎娘の厚化粧に似て、鼻持ならぬ気障加減に候。(大旅行

誌 8: 364)

第18期生（1920）は台湾を「内地」と異なる「奇妙な所」としつつも、親しみやすいと評価している。

七月廿一日。漸く上陸。初めて日本の植民地と名の付くものを見て好奇の眼を輝かす。（中略）台湾の第一印象は奇妙な所なりの一句に盡く。内地とは様子全く異なれど矢張り親しみ易く原始の野に文明の斑点を落とせる如し。（大旅行誌 13: 266）

台湾を成功例とする語りには、娘子軍や一攫千金を狙う山師が目立たないという“健全さ”を褒めた記述も存在する。台湾が、第二章で指摘した植民地に関する否定的な語りと対照的な評価が与えられている。第II章で引用した第16期生・両広湖南班（1918）は、次のように台湾の健全さに「喜悅」している。

船が台湾の地へ歩足を踏み入れた時殆んど直覚的に感じた事がある、従来吾植民地の欠陥は堅実なる企業家と、豊富なる資本家に乏しいことである、一度植民地と云う発展地の開拓せらるるや、思慮の浅薄な男女、若い者、子供、軍人、商人、職人、看護婦、娼婦、酌婦なんて云う種々の人間が雑然として入り込み、一場の活人画のパノラマが展開さるるのが常である、此の種の人間には定算もなければ、恒産もない、唯火事泥的不定分子に幻惑せられ、何物かをつかまねばやまぬと云う決死的覚悟が潜伏しておる換言すれば転んでも只是起さぬと云う物凄い光が輝いておる、従て其なす事業はどれもどれも不安定にして投機的である、故に事業と云うも沙上の閣樓と均しい、だから直ぐ瓦壊崩落する、其結果は失敗となり、自暴自棄となり、破廉恥となり、罪惡と化するのだ、私は台湾を一瞥してこの種の人間の比較的少いのを見て心から喜悅した。（大旅行誌 12: 297-298）

2) “日本” との同一視

前述のように、植民地的語彙をめぐって“植民地は文化が混交する場所”という言説が表れる傾向があるのだが、その点についても台湾は特殊な位置づけにあると言ってよい。

そもそも植民地台湾に関する記述で直接植民地的語彙が用いられることはそれほど多いわけではない。逆に、香港や安南などと比べると、かなり少ない印象を受ける。むしろ台湾を「日本」と描くケースにしばしばでくわす。第15期生・福建香港班（1917）からすれば、「唯日本であるという此単なる事実が包み切れない私達の喜び」なのである（大旅行誌 11: 205）。「そこには日本人が居る、日本の家がある、可懐しい母国の情趣にひたる

ことができる」のである (ibid. 205)。

台湾が「植民地」と位置づけられない傾向は、ベトナムを訪問した第28期生 (1931) の次の記述に端的に表れているように思われる。

総督府の所在地河内は丁度殖民地都市大連の市街と台湾総督府の所在地台北の町と旧都北京を合せた様な感銘の深い所だった。(大旅行誌 23: 233)

ここでは、「植民地」という言葉が当てられているのは台湾・台北なのではなく、大連なのである。

次の16期生 (1918) ・両広湖南班の記述はこうしたどちらにも取れる状況を示す好例である。まず彼は台湾に関する記述を、上海と台湾の比較から開始する。

俺は支那に来てから、由来夢の様な迷信伝説に富む、あの国土、詩歌を以て充された享楽の世界、偉大な大陸の色彩と、ロオマンチカルな情緒とを、又となく愛玩したが、自由の天地即ち世界人種の混血児の上海にはホトホト愛憎をつかした、其の癩癩の因は何かと云うに毛唐と云う白奴の跋扈と巧狡なる中国人の振舞である、俺は常も黄浦灘の大廈高樓の下や市街目抜の場所に立ちて、あの繁華と混雑する現象を見る毎に、不可解なる思索的境地に沈み、深い歎息に陥ること屢次であった、其反動として、俺は日本人としての自由天地を渴望焦慮して居た、特に台湾なる一語は自分の耳朶に一層強く響いた、夫以来其の名を思う時、一身の憂愁とか心労を忘れ心気一転、恰も恋の歡喜に酔った人の様に夢中に憧憬れた、賞に台北と云う未知未見の美麗な小都は、旅行前の光明であり、愛着の焦点であった。(大旅行誌 12: 297)

ここでは、上海とは西洋と支那の混在・混交の場であり、彼を見限らせるに足る場所である。台湾はその「反動」として彼を「渴望」させるものなのである。

もちろん彼は、台湾が上海のような混在・混交とは正反対の純粹の場と主張するわけではない。このくだりの後、先に引用した台湾の植民地化に対する自画自賛が展開されると、話題は「台湾の風物」に映っていく。

この亜熱帯的気分に加うるに日本的気分を加味しておる所は一種変態の風俗にして、日台折衷文明の産物である、日台文明の混血児たる台湾人の子弟は皆日本人を教師として、日本語を習い、各学科共日本の学校にて教へ込むものと殆んど同じである、台湾人の若い者は皆邦語を操る、一とかどの文明人なる是等の青年が内地人気取り和服をまとひ得得たる横著者も屢々見受ける、彼等は雑誌を読み小説に耽り、新聞に目を通すな

ど、余程日本化しておる、(以下略) (ibid. 299)

この箇所直後に、「邦人の都市経営としては完全に近い」(ibid.) というインフラの賞賛が続く。要するに、「世界人種の混血児」と「日台文明の混血児」とは、同じ「混血児」であるが、評価の点では大きく異なっている。

「世界人種の混血児」は彼を辟易させるものであるが、他方「日台文明の混血児」はそこまで否定すべき混交ではない。たしかに直接的に評価されていないものの、全体の文脈から判断すると、その混じり方はあえて否定する必要のないレベルのものとなっている。また混交が進んだ末の同化も否定されていない。彼の記述の背後に、日台を“同文同種”の関係だとする考え方を垣間見ることができよう。

さらに彼の記述の対象は“蕃人”(先住民)に移っていく。そこでも、文化的混交が語られる。すなわち、日本人男性と先住民女性の恋愛、先住民女性の日本語習得などである。そしてこの混交も否定や批判の対象になるのではなく、むしろ「美しい口オマンス」として描かれている。

ある菓売の青年が蕃地に踏み迷い酋長のために捕えられ、明日愈々殺さるゝことになった、幸に酋長に一人の優しい娘があって、其青年にすっかり惚れ込んで、夜青年をしぼってある荒縄をとき切って、二人手を取り合い、暫く逃げのびて、死を免れた、其青年は蕃女の意気に感動して己の妻にして琴瑟相和しておったが、不幸病魔のため倒れた蕃女は夫の死にはげまされ、日本語を習得し、遂に女教員に出世し、生蕃が内地観光の折撰れて通訳になり、遙々夫の故国に來り、青年の埋葬せられた京都を尋ね、夫の靈前に泣き伏したと云う、家人も之を哀み、家族として之を取扱い青年の弟妹等は嫂として彼女を遇したと云う美しい口オマンスがある、蕃女と云うも決して愛も情もないものでない彼等には暖い愛情を有し、女としての特性を十分具えておることを忘れてはならない、生蕃だからとて色恋の沙汰は相ならぬと云うことはない、恋に上下はないものだと、世人は云うておるは公平な見方である。(ibid. 301)

このように、東洋と西洋の混交は批判の対象となるのに対して、日台の混交は否定されるとは限らないという意味で、ニュートラルなものである。また、日台の混交の場合は“台湾”や“蕃人”が日本化することが当然のことのように描かれている。いわばここでは、同化は自然のなりゆきなのである。

3) 成功の基準としての同化

以上の分析からすれば、書院生の記述に表れた植民地は、同じ表現を用いつつも、「日本

の植民地」と「欧米の植民地」とで性格を異にするものとして表れていることが分かる。

まず植民地は、全体としてネガティブなニュアンスで使われることが多い。そして1930年代に顕著になることとして、植民地は西洋が不当に支配する地であり、日本がそれを解放に導く主体になるべきだという言説が使用される。その一方で、帝国日本の植民地台湾に対して用いられる際は、それが成功例と位置づけられるために、植民地的語彙はむしろポジティブな意味合いを帯びる。

また、帝国日本の植民地では同化は自然なものなのであり、統治が順調に進めば、形質的な差異が目立つ先住民でさえ同化が進むという認識を認めることができる。

これは台湾に限った話ではない。第29期生（1932）の一人は「満州国印象記」に取められた論稿の中で大連を、「日本文化をかく迄よく植付けたという点で驚いたが、まだ植民地らしい臭いが残って居る」（大旅行誌 24: 486）と述べている。この「植民地らしい臭い」とは、いまだ日本文化の移植が徹底されていない、言い換えれば日本文化と非日本文化の混交の状態にあるために残存しているものである。また、「匂い」ではなく「臭い」となっていることは、それが消されるべき対象であることを物語っている。首尾よく消された日には、「植民地らしさ」も消失するということだ。ここにも、同化が進めば植民地ではなくなるという言説を見出すことができる。

大連についての記述では、こうした意味での“脱植民地化”が成功の域に達しているとするものもある。第31期生（1934）の一人は、「大連という都は、上海、青島等とは違って、殖地的雰囲気をはんの僅かしか持たず、徹頭徹尾日本式に出来ている」（大旅行誌 26: 105）と賞賛している。「徹頭徹尾日本式」という状態が成立するには、「殖地的な文化の混交状態が無くなり、日本文化への同化が貫徹されなくてはならない。

逆に言えば、統治の“成功例”である台湾についてでさえも、文化的混交を記述するときには、そこに植民地的語彙を用いる余地が生まれてくる。たとえば第29期生（1932）・南支沿岸産業貿易班は台北北部の草山温泉を訪問した際に目にした光景を、「和服を着た台湾人が流暢な日本語を操り日本人と仲よく話している点など植民地に稀に見る麗わしい風景」（大旅行誌 24: 446）と評している。文化的混交の記述と植民地的語彙の使用は密接に関連している。

書院生の記述の中で、帝国日本の植民地統治の成功とは、同化の完遂なのである。同時に、同化の完遂はその土地がもはや“植民地”ではなくなることを意味している。言い換えれば、これは同化＝脱植民地化という図式である。台湾が“成功例”と見做されたのも、「日本の少なからぬ論者たちにとって、台湾は明確に『植民地』とみなすには地理的・人種的に近すぎると思われていた」（小熊、1998: 93）ことからすればもったもなことだと言える。

ただし、同化＝成功という言説が見られるとしても、書院生の記述に非植民者の排除の

論理が具わっていなかったというわけではない。“日本が他の民族を導いて、同化させるべきである”という言説はごく普通に見られるが、“導いた後に平等の関係になる”とまで述べている箇所を見出すのは困難である。

また、あたかも同化が自然の成り行きのように描かれているとしても、その同化が形質的な意味での同化（いわゆる“混血”）まで意味していたかは判断が難しい。台湾人が和服を着て日本語を話す光景を「麗わしい」と記した第29期生でさえ「雑婚政策」を否定している。

V. 書院生の植民地観

書院生の記述の中で、西洋的植民地像は帝国日本の植民地像と対照をなしている。そうした西洋的植民地像の典型は香港に見ることができる。多くの書院生が賞賛の言葉を残しているように、香港は英国による植民地統治の成功例である。けれども同時にそれは、どこまで植民地統治が進んでも、弱者東洋から強者西洋への同化は進展せず、両者の差異は残り続けるし、西洋が東洋を差別し搾取する枠組みも変わらない。

書院生の記述の中でこうした二種類の植民地観を区別できることは、「帝国主義」という言葉が使用される傾向からも裏書きできる。前述のように、書院生が「帝国主義」という言葉を用いる際、その行為主体はもっぱら西洋である。中国人など他者の言葉として引用されることがあっても、書院生が自ら、日本が「帝国主義」を実践すると記述することはほとんどない。むしろ先に紹介したように、「帝国主義」のそしりを受けても信念を貫けば道は開けるという、独善的と言いたくなるような決意が述べられることがある。『植民地支配』や『人種主義』は『欧米』に存在するものであって、日本には無縁だとされていた（小熊、1998: 663）という帝国日本の支配言説と基本的に一致している。

帝国日本の秩序の在り方において同化が大きな意味を持ったという指摘はなんら新しいものではない。たとえば小熊によれば、帝国日本の支配言説には『『欧米』モデルとされた『植民地』統治論に、後発性を背景とした同化論（≒国民統合論）が大幅に混入した』（ibid. 634）という特徴があった。「欧米を模範とした『植民地』支配を説くよりも、欧米と異なるという自意識のもとに一視同仁の『日本人』化を説くほうが、ナショナル・アイデンティティの維持に好都合であった」（小熊、92-93）からである。

また、大日本帝国の秩序の在り方を「中華帝国秩序と大英帝国秩序との混血であると同時に、それらへの対抗」（松浦、2006: 6）と位置づける松浦の議論にも通じる部分があるろう。「中華帝国秩序」は「国境を持たない同心円の政治的磁場」によって成り立っており、天皇を中心とする大日本帝国の秩序はその枠組みを引き継いでいる。『大旅行誌』の記述に当てはまれば、大旅行における帝国日本の秩序は、“日本”を中心と“日本性”の多寡

に応じてグラデーション状に広がる同心円の秩序をなしていると言うことができるかもしれない。大旅行的な植民地はその周辺にあり、同化が進めば進むほど、植民地は“脱植民地化”を果たして、日本化していくことになる。

VI. むすびにかえて

以上本論は、『大旅行誌』における植民地的語彙に注目し、書院生の考える植民地観を把握しようと試みてきた。分析から分かったことは、彼らの記述に表れる植民地像には西洋型のものと、それと対照的な帝国日本型のものという二種類に言説化されるということである。そしてこの二項対立では前者は、古いものとして克服・解消されるべき悪しき植民地支配となり、後者はそれにとって代わる新しいものであり、アジアを解放に導く善き秩序ということになる。

また、両者は同化の点でも異なっていた。帝国日本型の場合、植民地的語彙は支配者と被支配者の間に差異が残ったままの、統治がうまく行っていない不完全な状態において用いられる傾向がある。つまりこれは、同化が進めば進むほど、その統治は成功とみなされるということである。同化は成功の基準となり、植民地が植民地でなくなる条件となっていた。いわば“脱植民地化”に同化は不可欠であった。台湾が“成功例”と位置づけられるのも、書院生にとって台湾が極めて“日本”的な、同化が進んだ地と映ったからである。

参考文献

- 岩田晋典 2017 (予定) 「大調査旅行における書院生の台湾経験——“近代帝国”を確認する営み」加納寛編『書院生、アジアに行く——東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ。
- 小熊英二 1998 『〈日本人〉の境界』新曜社。
- 東亜同文書院(編) 2006 『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ(雄松堂オンデマンド)。
- 藤田佳久 2007 『東亜同文書院が記録した近代中国』愛知大学東亜同文書院記念センター。
- 藤田佳久 2012 『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社。
- 松浦正孝 2006 「序論 一国史・二国間関係史からアジア広域史へ」『国際政治』日本国際政治学会第146号 1-20頁。